「自身を他者化する視線の形成過程」を求めて…

先日読んだ本の中に、「広汎性発達障害」の行動特性として「自身を他者化する視線が乏しい」との記述があった。

量的、質的に異なりはあれど、「自身を他者化する視線が乏しい」のは、子どもの中のいじめ、親による虐待、成人式で騒ぐ若者、少年による悲惨な事件、等々、あらゆる問題の底流にも見られるような気がしていた。

そこで、「自身の中での『自己－他人』の関係のなりたちの育ち」は、まずどういう過程で子ども（人間）は身に着けて行くのか、知りたいと思っていた。

丁度そうした折、「幼児期－子どもは世界をどうつかむか－」の新聞書評の「『話しかける自己と、それを聞く自己』の会話の重要性が語られ、『好きな人』から語りかけられた言葉が二つの自己の橋渡しなる、と著者は言う」の記述が目に止まり、「自身を他者化する視線」へのヒントが見えてくるかも知れないと思い、早速購読した。

発達心理学者の著者は、「現代の子どもが置かれている社会的・教育的状況をみる時、幼児の今後の成長発達と人間的充実のために必要な『しつけの環境』、『遊び環境』、『表現環境』、『ことば環境』として、どんな問題をはらんでいるのかを、できるだけ原理的な形で吟味したい」との願いから、幼児の視線から、また、大人との係わり合いから、その形成過程について詳しく触れている。

幼児が「自身を他者化する視線」を持つには、最初に出会う大人（好きな人）を見習い、係わり合い中で獲得していくだけに、能力主義、情報処理優先的な現代（大人）社会のために、幼児期の「自己－他者」形成の営みが脆弱（幼児期の空洞化）になっている時だけに大人の子ども観が問われることと思う。

確かに、本書は「親や保育者をはじめとし、人間としての発達と教育に関心をもつ人たちの中に、新たな『幼児期（ひいては人間そのもの）』についての論議を引き起こす手がかり」となるだろう。

現代の社会現象等から、幼児期の「自身を他者化する視線の形成過程」を知りたいと思っていた自分には、打って付けの本であった。

子どもと大人（人間同士）の相互作用に関心ある方に、一読をお勧めします。

（2005 年 6 月 20 日　記）